

1. 「大きな木」の話

ベストセラーになって世界中の子供たちに愛読されるようになったシェル・シルヴァスタイン（米人）の「大きな木」（原著名：The Giving Tree）、1本の大きなりんごの木が、一人の幼年期、中年期、老年期を過ぎた男との友情を描いた絵本で、この大きな木はその男の成長につれての要求に従って、初めはりんごを、次に木の枝を、次に船作りのために幹を与え、しまいには切り株一つになって老人の一休みする椅子になると言う話である。

りんごの木の自分を与える喜びを表したこの絵本を、私の敬愛するある幼稚園の園長は、ここ数年年長組の園児にお誕生会で贈っている。ところがイギリス、スウェーデン、韓国の子供たちは作者の意図を正しく受け止め”与えることの喜び”を共感しているが、日本の子供たちは“かわいそうな木””本当はいやなのだが仕方なく自分を与える悲しい話”と言うように、正しく著者の意図を受け止めていないで、友情の心が骨抜きになって伝わってしまっているの、母親にも元の意味を教えていると言うことを紹介してくれた。

私はこの話はまさに今の我々の問題だと、ハットさせられてしまった。

2. “ありがとう”と“ごめんなさい”

ああ役に立ってよかったと言うことはうれしいことである。“ありがとう”これは与えられた側の心情である。

自然は私たちに必要なものを与えてくれる。この自然の恵みに”ありがとう”は心情である。上の絵本では、「ちびっこは 木は 大好き・・・そう とても 大好き、だから 木もうれしかった」とかりんごを与え、枝を与え、幹まで与えるたびに、「木は それでうれしかった」とたくまない与える喜びを描いている。これを与える悲しい話としてのみ子供たちが受け取るのはなぜだろうか。我々大人社会が“ありがとう”の心をなくしているからである。そこには友情の関係が生じない。心からの”ありがとう”がないということは、心からの”ごめんなさい”も無くなってしまふ。

物が豊かになって有難いことである。しかし豊かさが過ぎて”ありがとう”が無くなってしまった。だから、全くの浪費や放蕩的といってもよい消費にも“ごめんなさい”の心はなくなってしまうのである。

戦後の貧困から立ち上がり、勤勉を称えられた日本人は、いつの間にか”ありがとう”も”ごめんなさい”も失って大量生産、大量消費、大量廃棄という市場経済の結末に向かってトップを走ってしまったと言えよう。日本の子供たちの、犠牲になった悲しい話と言う感じ方は“ありがとう”のなくなった現社会への満たされない子供の心情といえよう。

3. 過剰を恥じる心

過剰という熟語をみていたら、有り余る遣ちと放めることに気が付いた。また、論語ではあるが“過ぎたるは及ばざるが如し”ということわざもある。本来、日本人は過剰を愚点かとしていたのに、大過剰生産、大過剰消費、大過剰廃棄という崩壊の道にのめり込んで歯止めがかからない。ようやく固収だりサイクルだといひだしたのは結構なのだが、過剰を恥じていない。これでは過ちの結果の対処療法しか出てこない。現実が病んでいるので対処療法も欠かせないが、根本を直す勇気を持たないでは、とても持続発展する社会の実現は無理だと思う。例えば、鹿乗物の減量化においては、①発生回避②リサイクル③適正な処理、が基本原則であるのに、根本で最重要の①発生回避の課題の取組は避けて通っている場合が多い。“過ぎたるは及ばざるがごこし”ということわざは過剰は不足と同じだという教えだが、不足の充足は比較的足並みを揃えやすいか、過剰をなくして足るを知るのは抑制だから利害関係か入りより難しい。

過剰を恥じることは多くの現状否定・自己否定を伴う弟気のいることである。

4. 職人かたぎ、商人かたぎ、消費者かたぎ

腕利きの仕事職人の作ったものほど、使うほどに味が出てくる。その味をかみしめてくれる人のためには労をいとわず、時には利害までも超越してしまう。職人かたぎの一つである。商売でも同じようなことがある。職人かたぎや商人かたぎの人に出会うとうれしくなり、尊敬してしまう。彼らはモノを通して役に立つ喜びの心を持っており友情がある。

役に立つと言えば、かつて大量生産を通して必要なもの不足が満たされたことにも感謝しなければならない。そこには事業家かたぎ、技術やかたぎなどがあつたからであろう。

今、人間環境の問題を、仕事でも、市民生活でも、私生活でも常に筆頭課題と位置づけていかないと近い将来が危ない。それには上にのべたモノつくりにおけるかたぎと同様、モノつかいで消費者かたぎとでもいふべき、過剰を恥じる心での最終選択が極めて重要であると感じるのである。

5. カヤの中での願いでありたい

以上、最近感じたことを書かせていただきながら、お前は過剰を恥じる心があるのかと自問自答させられた。モノつくりの現役を離れたから比較的歯切れよく言えるのかもしれない。しかし過剰をほって置いて環境にやさしいなどとはとてもいえない。少なくともカヤの外の議論ではなく、大過剰を恥じ、実質ある豊かさを求め工夫する企業や団体や個人が評価される社会転換に役立ちたいものだとカヤの中で頼っているつもりである。

